

取材先：株式会社北九州パワー 森永 洋市 様、吉本 雄一 様

## エネルギーの地産地消で、持続可能なまちへ



みなさんは、私たちの暮らしを支える「電力」がどのように作られ、供給されているか考えたことはありますか？電力は目に見えず、その仕組みも分かりにくいものです。今回は、地域のエネルギー供給を担う「株式会社北九州パワー」の森永洋市さん、吉本雄一さんにお話を伺いました。

北九州パワーは、北九州市や民間企業の出資で設立された地域エネルギー会社です。市内で発生する資源を活かし、公共施設や事業者向けに再生可能エネルギー由来の電力を供給しています。特に特徴的なのは、市内の清掃工場と連携し、ごみ処理の際に発生する熱を利用して生み出された電力の供給を行っている点です。

再生可能エネルギーと聞くと、風力や太陽光を思い浮かべる方も多かもしれません。しかし、これらは天候や時間帯によって発電量が変動します。一方、清掃工場の発電は安定しており、年間を通じて一定の電力供給が可能です。北九州パワーはこの仕組みを活かし、清掃工場を中心にしながら、他の再生可能エネルギーと組み合わせることで、安定的かつ持続可能な電力供給を実現しています。

また、北九州パワーの特徴のひとつが「地産地消」です。市内で発生する資源を活用し、公共施設や企業へ供給することで、地域の低炭素化を推進するとともに、中小企業の下支えにも貢献。地域産業の活性化にも寄与しています。

家庭や企業から出たごみが清掃工場処理され、その熱が電気に生まれ変わり、地域に還元される。この循環が、私たちの暮らしを支えているのです。

北九州パワーは、2025年までに市内の全公共施設の電力を再生可能エネルギー由来のものへ切り替えることを目標に掲げています。エネルギーの地産地消が進むことで、北九州市はより持続可能なまちへと成長していくでしょう。地域で生まれたエネルギーを未来につなげるために、私たちも北九州市のこれからについて考えてみませんか？

(北九州市立大学2年 江尻 希愛・三宮 蘭・坪根 早希・堂領 茉凜)



## ESD協議会での活動を振り返って

あっという間の5年間！

2020年コロナ禍で始まり、まなびとESDステーションは閉館しており、真っ暗でした。会員が94団体もいるのに全くどんな人が分からず、会うことも出来ない、活動もどんな活動かネットや、紙面では分からない状態からのスタートでした。何かできないかと考え、「オンラインでできること」に力を入れた2年間でした。徐々にコロナ禍もあけて、猛ダッシュで取り戻していきたい！という事務局長と一緒に飛び回り、会員の活動周知や、まなびとESDステーションの活発化に取り組み、私自身たくさん成長ができ、一番印象に残った年でした。たくさん出会った会員さんたちは皆、良い方ばかりで、良い活動している方ばかりでした。実習で関わってきた学生は50人弱、コロナ禍で苦勞して頑張ってきたのに、中止になることもあったり、参加者集めに苦勞したり、もどかしい思いを私もする時もありましたが、主体的にできていく学生の成長を感じ取れた時はとても嬉しかったです。みんな各地で頑張っていることを願います。私もコーディネーターとしてパーフェクトではなかったとは思いますが、全力で頑張ったと思います。この5年間に会った人たちに感謝しかありません。今度もどこかで活動していると思うのであったときはまた、よろしくお願いたします！

(岩谷 かおり コーディネーター)



### 編集後記

昨年、ESD協議会の引越や新たな体制づくり、RCEユース会議と目まぐるしく過ぎていきました。1号から37号まで未来パレットの編集長を務めてきましたが、今後は事務局編集となります。37号も若さ触れるユースの取材記事で溢れています。ぜひ動画もチェックしながらお楽しみください！

(原賀)



# 未来パレットだより

ESDとは、「持続可能な開発のための教育」を意味する英語 Education for Sustainable Development の頭文字をとったものです。

## ユースが大活躍！国内RCE会議 IN 北九州

2025年2月10日・11日の2日間、「国内RCE実務者会議・ユース会合」が北九州で開催され、全国のRCEから実務者やユースメンバー43名が集まりました。ユースが主体となって行ったプログラムの中心は北九州の魅力の動画配信！若い感性から生まれた多様なコンテンツをURLからご覧ください！

国内RCE会議は毎年、国連大学の協力で国内8カ所のRCEが持ち回りで開催しており、今年度は北九州ESD協議会が主催しました。初日はタカミヤ環境ミュージアムに集合し、カードゲーム「北九州マイアース」を通じて交流を深めました。続いて、館内を巡りながら松岡俊和館長による「北九州の公害克服の歩み」のレクチャーが行われました。北九州の参加者にとっては学び直しの機会となり、市外からの参加者にとっては新たな発見の場となったようです。

その後、実務者グループとユースグループに分かれて活動を実施しました。まず、ユースチームは、ユースの高城将英さん中心にSNSを活用した情報発信として、館内を巡った印象を「環境ミュージアムの紹介」動画を制作するワークショップに取り組みました。また、実務者グループは、各地域のESD活動の進捗報告や課題をテーマにグループワークを行い、未来創造委員会／好きっちゃ北九州の入門真生さん、活動委員会／KID'sworksの大久保大助さんの協力のもと、活発な議論が展開されました。

2日目は3つのグループに分かれ、テーマごとのフィールドワークを実施しました（詳細は裏面に掲載）。ユースメンバーは、それぞれのフィールドワークで得た学びをもとに動画を制作しました。



Instagramに投稿された動画

これらの取り組みは、RCE間の持続可能な情報共有と発信のプラットフォーム構築を目的とし、ユースが主体となって企画・実践したことで、彼ら自身の学びが深まるだけでなく、実務者にとっても大いに刺激となる機会となりました。

今回のユースの取り組みを支援して下さった国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)の龍原梢様、小西美紀様、そして、フィールドワークを受け入れて下さった皆様に心より感謝申し上げます。



参加者によるミュージアム見学



グループディスカッションの様子

(代表・事務局長 日高 京子)

## RCEってなあに？どんな役目を担っているの？



RCEとは、「Regional Centre of Expertise on ESD」の略称で、国連大学が認定する、ESDを推進するための地域拠点のことです。持続可能な社会の実現には教育が重要とされ、RCEは地域ごとの社会・環境・経済課題に対応しながら、ESDの普及と実践を行っています。2005年度に始まったこの認定制度により、北九州ESD協議会は2006年に認定を受けています。2025年3月現在、日本国内には北海道道央圏、仙台広域圏、横浜、中部、兵庫・神戸、岡山、北九州、大牟田の8つのRCEがあり、世界では197カ所が認定され地域特性を活かした活動を展開しています。

RCEの主な目的は、地域に根ざしたESDの推進を通じて持続可能な社会の担い手を育成し、学習ネットワークを構築することです。そのため、各RCEでは、環境教育、国際理解教育、地域コミュニティとの協働、持続可能なライフスタイルの促進など、多岐にわたる取り組みを行っています。

また、RCE同士の連携を深めるため、毎年開催される国内の会合のほかに、2年に1度「グローバルRCE会議」が開催され、世界のRCE関係者が集まり、活動の成果共有や今後の方向性を協議しています。今年は何と日本の岡山県で開催される予定です！北九州ESD協議会も持続可能な未来を築くための地域の重要なプラットフォームとして、教育機関、行政、市民団体、企業などが協力しながら、ESDを推進しています。ぜひこの機会に、RCEの活動について関心を持ち、情報をチェックしてみてください！

(北九州市立大学1年 石橋 望美・藤本 理子・吉見 珂蓮)

# Think Globally, Act Locallyを発信!

RCEユースの  
instagram



会議 2 日目は、3 つのグループに分かれてフィールドワークを行いました。ユースが企画した学びのテーマは、①地域特有の課題解決を通じてグローバルな課題への視点を養うこと、②学びや活動を紹介し、情報共有・発信のためのプラットフォームの基盤を築くことの 2 点です。以下、活動報告と動画配信をお楽しみください!

## 洞海湾・若松コース

私は北九州市若松区を訪問しました。若松コースは旧古河鉱業若松ビル、アビュレッドブリジウム、洞海湾クルーズの三か所を訪問する盛りだくさんの内容でした。一か所目の旧古河鉱業若松ビルは 1919 年に竣工し、当時は古河鉱業(株)の事業所として石炭の受払等の業務が行われていた建物です。この建物はレンガ造りの柱型とその間の石造りの部分の調和が美しい貴重な近代建築の一つです。1997 年に入居者がいなくなった後解体が検討されましたが保存を求める声があがり、現在では観光施設・コミュニティホールとして活用されています。二か所目のアビュレッドブリジウムは北九州市戸畑区と若松区を結ぶ若戸大橋の橋台にある展示室であり若戸大橋 50 周年を記念してつくられました。一般解放はされていないため、北九州市民でも訪れたことのある人は少ない施設です。開通から 50 年の大規模補修工事を取り換えた実際の橋梁部材や建設当時の設計図など、貴重な資料を見ることができました。洞海湾クルーズではガイドの方に洞海湾周辺の建物を紹介してもらいながらクルージングを行いました。洞海湾は高度経済成長期に魚の住めない死の海と呼ばれていましたが市民、行政、企業が協力し公害を克服した歴史を持っています。



クルーズ船から見た若戸大橋



(ユース会員 高城 将英)

1 日目に訪問した環境ミュージアムで学んだことと直結する内容であり理解が深まりました。どこも若松ならではの場所であり、北九州の歴史を学ぶことができました。



ラジオ収録の様子

## もやい聖友会

もやい聖友会は、福岡県北九州市八幡西区を拠点とする社会福祉法人です。「おたがいさまで笑顔がいっぱい」を理念とし、高齢者介護事業を中心に、地域共生社会の実現を目指し、幅広い事業を展開しています。今回私たちは特別養護老人ホーム「銀杏庵穴生倶楽部」を訪れ、施設内の見学や、権頭理事長より法人立ち上げのきっかけから、直近の取り組みをお聞きしました。特別養護老人ホームと聞くと、高齢者の方々が生活する施設というイメージをもたれるかもしれませんが、それだけではありません。当施設には子どもたちが遊べる場

所や、誰もが利用できるカフェ、さらにはコミュニティ FM のスタジオも併設されており、地域の方々が集まれる場所となっていました。さらに、入居者の方と、訪れた地域の方が触れ合える様な施設づくりを行っており、閉鎖的なイメージのある特別養護老人ホームの印象が、大きく変わるような施設となっていました。施設見学の最後にはラジオ収録を体験。普段、あまり経験することの無いラジオ出演に少し緊張する場面もありましたが、権頭理事長パーソナリティのもと、和やかに収録となりました。収録の様子は「社会福祉法人もやい聖友会 もやい通りスタジオ」の YouTube チャンネルにてご覧いただくことが出来ます。是非そちらもご覧ください。



(ユース会員 安江 海都)

## 曾根干潟

福岡県北九州市小倉南区に広がる曾根干潟は、市内最大であり 517ha の広さがあります。この曾根干潟では、絶滅が心配されているズグロカモメやダイシャクシギなどの野鳥を観察することができます。また、生きた化石といわれるカブトガニの産卵地としても有名なのがこの曾根干潟です。

今回私たちは、まず、曾根干潟にある「カブトガニ自慢館」へ行ってきました。ここでは実際に生育しているカブトガニを観察しながら、日本カブトガニを守る会の高橋俊吾先生に、カブトガニの生息域や特徴、どうしてこのような体の形をしているのかなどを詳しく教えていただきました。

次に、曾根干潟を散策しながら野鳥観察を行いました。ズグロカモメなど沢山の野鳥を観察することが出来ました。

野鳥観察のあとは、原賀さんによる布絵シアターです。布絵シアターでは曾根干潟のそれぞれの季節の顔を布絵を用いて説明していただきました。また、体験型のシアターであり、聞き手はズグロカモメやダイシャクシギなどになりきる衣装を着ながら、楽しく説明を聞きました。



布絵シアターの様子

実務者もユースも興味津々だったので、曾根干潟について学べた濃い時間になりました。最後には、カブトガニ自慢館の横にある北九州では有名なカキ小屋にて、牡蠣を堪能して振り返りを行いました。

高橋先生、原賀さんそして、お手伝いくださった皆様本当にありがとうございました。



(ユース会員 奥 悠耶)

## 企業訪問

取材先：極東ファディ株式会社 吉水 請子 様

# 本当のジェンダー平等ってなんだろう?



近年、「ダイバーシティ(多様性)」が注目されるようになり、企業や社会全体でジェンダー平等の推進が進んでいます。しかし、私たちの身の回りで行われている取り組みは、果たして「本物の」ジェンダー平等と言えるのでしょうか。今回は、カフェ運営や高品質な冷凍食品・コーヒーの販売を手がける極東ファディ株式会社の吉水請子さんにお話を伺いました。



ファディ売り場の様子

吉水さんは、特に女性の活躍推進に力を入れており、企業の現場でどのような取り組みが行われているのかを教えてくださいました。極東ファディでは、冷凍食品の運搬や倉庫業務など、体力を必要とする仕事が多いため、以前は店長職は男性が中心となることが一般的だったそうです。しかし、同社の主な顧客層は女性でありながら、管理職が男性ばかりでは、お客様目線のサービス向上が十分といえるのだろうかという課題がありました。

そこで、女性が店長や管理職として活躍できる環境を整えることで、より消費者の視点を反映し、サービスの質を向上させる取り組みを進めています。女性が働きやすい職場環境をつくることは、ジェンダー平等の推進にとどまらず、企業の成長にもつながると考えられます。



ファディ吉水様と吉見

また、ジェンダー平等は「女性の活躍」ととどまるものではありません。様々な属性の人たちを包含する親しみやすい組織風土がファディにはあるそうです。

さらに、「女性の活躍推進は、男性にとっても働きやすく、能力を発揮できる」という視点も大切だと吉水さんは言います。ジェンダー平等とは、一方の性別を優遇することではなく、すべての人が公平に能力を発揮できる環境を整えることなのです。

多様性が重視される現代だからこそ、表面的な取り組みにとどまらず、本質的なジェンダー平等と多様性の実現を目指していくことが求められます。「誰もが生きやすく、働きやすい社会とは何か?」を考えるきっかけとして、みなさんもぜひ、お近くのファディに立ち寄ってみてはいかがでしょうか?

(北九州市立大学 1 年 吉見 珂蓮)

## 大学教員のESD活動!? 教えて、村江先生!!

取材先：北九州市立大学地域共生教育センター(421Lab.) 村江 史年 准教授



北九州市立大学では、副専攻として「環境 ESD プログラム」を履修できます。例えば「法学×環境→環境政策」のように、異なる専門を掛け合わせることで、新たな視点を養うことができます。今回は、このプログラムの運営に携わる北九州市立大学地域共生教育センター(421Lab.)の村江史年准教授に、防災と ESD 活動について伺いました。

村江先生は地域防災を専門とし、防災啓発や災害時の支援活動に取り組んでいます。現在の北九州の課題として「防災意識の格差」が挙げられます。市内には世界遺産・八幡製鉄所があり、地盤の強固さを見越して建設されたと言われていました。また、昭和 28 年の豪雨災害以降、大きな自然災害が発生していないため、市民の防災意識が比較的低い傾向にあるそうです。持続可能な防災社会を築くには、子どものころから防災知識を学び、それを次世代へ伝える「学びのサイクル」を確立することが不可欠です。そのため、最低限の防災知識を身につけるとともに、防災人材の育成も重要だと村江先生

は語ります。また、村江先生は日本国内にとどまらず、インドネシアでも防災教育を推進しています。日本では文部科学省の指導により避難訓練が学校カリキュラムに組み込まれていますが、インドネシアではその制度がなく、現地の子どもたちは災害自体を知っているものの、対処法を知らないことが多いそうです。そこで、現地の教師と協力し、30 校をモデル校として研修を実施しました。教師たちにとって未経験のことを始めるため「なぜ防災教育が必要なのか」「教師の負担をどう減らして進めるか」といった課題がありました。そのため(1) 体育の授業に避難訓練を組み込む、(2) 社会・理科を統合した「IPAS」で防災マップを作成する、(3) 紙の代わりに葉を使って学ぶなど、現地の文化に根ざしたカリキュラムを導入しました。今後は高校生向けにも防災教育を拡充し、より専門的な内容を提供していきたいと考えているそうです。

防災活動のやりがいについて尋ねると、「防災において感謝されたら負け」という言葉が印象的でした。防災の成果は被害が出たときに初めて分かるものであり、「何も起こらないこと」が最大の成功だといいます。つまり、防災活動の目的は、被害そのものを未然に防ぐことなのです。最後に、村江先生は「防災は非日常だからこそ、関心を持ちづらい」と指摘しました。しかし、災害から大切なものを守るには、日頃から身の回りのリスクに目を向けることが不可欠です。「災害は思っているよりも身近に潜んでいる」。この意識を持つことが、いざというときに大きな違いを生むのではないのでしょうか。

(北九州市立大学 1 年 石橋 望美)